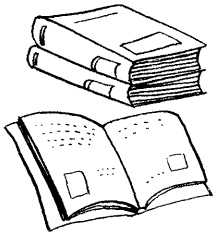
特集 緑蔭図書紹介

梨木香歩『ぐるりのこと』

内藤知美



梨木香歩の作品に初めて出合ったのは、『西の魔女が死んだ』でした。児童文学作品といえるこの本から、日常の生活の中ではぐくまれるファンタジーの世界を感じました。そして、この作品には日本的な風土やそこに生きる家族を描きながらも、どこか西欧的な人間観が感じられ、両文化の交錯が魅力であると思いました。その後は『裏庭』『からくりからくさ』『りかさん』『エンジェルエンジェルエンジェル』と梨木作品を読み進め、彼女の選ぶ繊細な言葉と言葉の裏にある物事に対するていねいな観察力に魅かれ、頁をめくる手は加速度を増していったように思います。

今回、緑蔭図書に取り上げるのは、『ぐるりのこと』（新潮文庫　二〇〇七）です。もともとは季刊誌『考える人』での連載であり、初の随筆集『春になったら苺を摘みに』に続く作品です。物語作品の中に見え隠れしていた彼女のテーマが、自身の言葉でストレートに語られていて、彼女の人間観に触

れつつ深く引き込まれていきました。

『ぐるりのこと』という本のタイトルは、彼女が敬愛する菌糸類研究者が、子どもたちに向けて「自分のぐるりのことにもっと目を向けてほしい」と言った言葉から名づけられました。人間の感覚をはるかに超えるスピードで、全ての現象が皮膚の上をつるりと滑っていくような希薄な世界へと巻き込まれ変容していく時代のうねりの前に、圧倒的な無力感に打ちのめされ、揺らぎを感じていた梨木は、その揺らぎを受け止めつつ、「自分の今いる場所からこの足で歩いて行く、一歩一歩確かめながら、そういう自分のぐるりのことを書こう、と、私はこの連載のタイトルをきめた」と述べています。

自分の今いる場所を基点とした「ぐるりのこと」は、実は壮大な領域でもあります。ぐるりの世界を書くということは、人と関わるすべての問題に「自ら関わる」ことを宣言するという意味でもあるのです。梨木は、関わって生きることを決意し、言葉を通して世界を表現していこうとしているのです。

つづったテーマは、「境界」「向こう側とこちら側、そしてどちらでもない場所」「共感する行為」「群れる行為」など、人が生きるうえで欲求しつつ、拒否しつつ、しかし巻き込まれざるを得ない「関係性」の問題です。もちろんそれは政治の問題を多分に含んでいます。

歴史の中で繰り返されるさまざまな問題に対して、「共感するというのは大事なことだ。が、それはあくまで『自分』の域を出ない。自分の側に相手の体験を受けとめられる経験の蓄積があり、なおかつそれが揺り動かされるだけの強い情動が生じなければ働かない」と述べ、「私たちの経験してこなかった相手の歴史に対して、そしてもしかしたらそれが自分のものとなっていたかもしれない可能性に対して、自分を開いていく……つまり、他者の視点

を、皮膚一枚下の自分のうちに同時進行形で起きている世界として、客観的に捉えてゆく感覚を、意識的なわざとして自分のものにする」ことはできないかと問い続けます。

観念的ではなく、プラクティカルなものとして、思考ではなく、体感されるものとしても描きだしていきたいと彼女は言います。そしてその強い意志は、「ぐるりのこと」を描く〝わざ〟にも現れています。自分と関わる世界を描き出すために、時間や場所を超越・往来し、読者の思考を開きながら、貪欲に試行錯誤を繰り返し、世界を描く方法を模索しています。

本とともに「ぐるりのこと」への思考を進めるうちに、彼女が描く「共感」という言葉の背後にある力関係、群れることの安堵感と欺瞞性、多様で複雑な問題をクリアにしたいという欲求への理解とその性急さへの警鐘など、「子ども」という他者と共感し、個として尊重し、共に歩んでいこうとする保育関係者にとっても、共通でかつ核心のテーマや問題が浮かび上がってくることに気づかされます。そして保育研究が、子どもを理解するという名目の下に、子ども不在の性急な結論を導き出そうとすることへの危惧も、著作の内容と重なってきます。

梨木は、「もっと深く、ひたひたと考えたい。生きていて出会う、さまざまなことを、一つ一つていねいに味わいたい。味わいながら、考えの蔓を伸ばしてゆきたい。例えば、共感する、ことが、言葉に拠らない多様性に開かれてゆく方法について。」と、「ひたひたと考える」ことを希求しています。また「肌身が経験する、圧倒的なリアリティの中に参加している、という感覚は未だかつて語られたことのない言葉を使いたいと強く欲求させる」と述べ、常に新しくあり続ける世界を描く方法を生み出すことを切望しています。

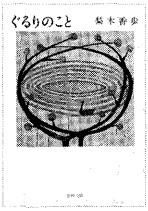
生活の中の積み重ねの中で感じられる「確からしさ」、決して確実なものは存在しないが、そこに感じ取れる「確からしさ」の気配をとらえていくこと、すなわち体感を起点として世界をとらえようとするその方法は、子どもと共にある人にとっても不可欠な感覚であり、子ども理解の基本であるように思います。

広島で焼かれてしまった折鶴を折りながら「『切れる』若者がいるのなら、しょうがないな、と、社会のどこかが『繋いで』ゆけばいい」という、生きることへのひたむきで強い作者の意志に心を動かされ、子どもを取り巻く環境の変化や時代のうねりの性急さに打ちのめされながらも、もう一度原点に返って「子どもと一緒にいる営み」をていねいに味わいたいという思いを励まし支えてくれる作品でした。

そして、それ以上に魅かれたものは、ぐるりの世界を描き出す方法へのあくなき探究心です。彼女が選んだ方法は「物語化」であり、自身を取り囲む多層な世界に住まう、地霊・言霊の力とおぼしきものを総動員して、一筋の明晰性を辿りゆこうとしています。「自分の内側にしっかりと根を張ること。中心から境界へ。境界から中心へ。ぐるりからくみ上げた世界の分子を、中心でゆっくりと滋養に加工していく」物語を語る営みは、語る方法への不断の模索と両輪なのです。

本を閉じて、一息つきゆっくり周りを見回しながら、子どもと共に生きることの営みを、どのような方法で語っていくのか、問い続けていきたいと思いました。

（武蔵工業大学　准教授　保育学・児童文化学）

ぐるりのこと

梨木香歩著　新潮社